

第1回相馬港復旧検討会 議事概要

日時等：令和4年4月13日（水） 15：30～17：30（WEB）

1. 主な議事

- 事務局（東北地方整備局及び福島県）より、復旧検討会の進め方（案）及び被災状況等について説明した後、構成員による意見交換を行った。

2. 主な意見

（3-1 岸壁）

- 被災前後の基準点変化を踏まえ、最大で約80cm程度の水平変位が生じたとの結果は信頼性が高い。この水平変位により、背後地盤が約80cm程度沈下し、加えて、岩ズリの体積収縮により約40cm程度沈下、合計約1.2m程度沈下したと解釈できると思われる。
- 背後地盤のボーリング調査について、どのような成果を得るために行うのかによって調査する対象や内容が変わるので、そこを明確にすべき。
- 今回の測量結果からケーソンが18cm程度沈下しているとのことであるため、基礎地盤が変形している可能性がある。この点、潜水調査でしっかり確認すべき。
- 3月16日（今回）の地震動による地震時応答解析（FLIP）について、最新の地盤調査結果を反映し検証すべき。
- 岩ズリの体積収縮は終局状態に近づくまでは再度の地震でも起こり得る。岩ズリの粒度も影響するので、ボーリング調査結果が大いに参考になる。
- 今回の地震動による変位等を踏まえると、耐震性能は満足されており、原型復旧を基本とする復旧方針は妥当と考える。一方、現在実施中の3号ふ頭における余震観測結果を踏まえたFLIPによる照査は必要。併せて、ケーソン背後で生じた段差を早期に解消又は部分的に沈下させない等の対策は今回の復旧方針の肝であるため検討願いたい。

（矢板式岸壁）

- 矢板が変位したのか、背後の控え杭も含めて変位したのか、又は、矢板の足元（地中部）も変位したのか、これらの複合モードを考えるべき。
- 矢板の応力状態の評価が必要なので、傾斜角や水平変位を正確に把握する必要がある。東日本大震災、令和3年2月地震、今回の地震とトータルでどれだけ変位しているかも重要。
- 矢板の変形状態の把握のため、潜水調査において、鉛直方向に連続的に水平

変位がわかる手法を採用するのが良い。

(液状化対策)

- 岸壁の利用や背後の臨港道路との接続等も含め、耐震岸壁の取付部など、港全体としての復旧の観点で液状化対策を絞って実施することも考えてみるべきでは。

以上